

# 社会的比較に於ける自己卑下傾向と 相互独立性－相互協調性との関連<sup>1)</sup>

－文化間変動と文化内変動は並行するか？－

高 田 利 武\*

Relationships between independent/interdependent self-construal  
and the self-critical social comparison

－Do cultural differences imply individual differences?－

Toshitake TAKATA

## 要 旨

本研究の目的は、文化的自己観——相互独立的自己観と相互協調的自己観——の相違による社会的行動の文化間の変動と、文化的自己観が個人に内面化された程度——相互独立性と相互協調性——の差異がもたらす個人間変動が並行するか否かを検討することにある。日本人の自己卑下傾向と加奈陀人の自己高揚傾向を実験的に明らかにしたHeine, Takata & Lehman (2000) の被験者を対象にして、高田・大本・清家 (1996) の尺度で測定された夫々の被験者の相互独立性・相互協調性と、自己卑下－高揚傾向との関係を検討した。

日本人被験者は加奈陀人被験者よりも相互独立性は低い一方、相互協調性は高く、それがHeine *et al.* (2000) の示した文化間変動をもたらしめていることが示唆された。更に、日本人被験者の場合は、相互独立性が高いほど自己卑下傾向が弱く、文化間変動と文化内変動との一定の並行性が示唆された。一方、加奈陀人の場合は何等の関係も見られなかった。相互独立性・相互協調性が測定された加奈陀人被験者が一部に止まること、その実験条件間の等質性が確保されていなかったことがその原因として考えられ、尚今後の検討を要すると思われる。

## 問 題

文化による人間行動や心理の相違に着目し、それを闡明する概念の1つに文化的自己観ある。これは、或る文化に於いて歴史的に共有されている自己に就いての前提であり (北山, 1998)、西欧文化に特徴的である相互独立的自己観と亜細亜文化に優勢である相互協調的自己観とに大別される (Markus & Kitayama, 1991)。この概念は、文化差をもたらす心理プロセスを明確にし得なかった従来の比較文化研究の弊を除き、文化レベルと個人レベルの変動を同時に視野に入れることを可能ならしめた (Singelis, Bond, Sharkey, & Kriss, 1999)。而して、2つの自己観は広範囲

に亘る心理過程と相互規定的に関連し、自己関連行動に於ける諸文化間の変動を導いていることを示す知見が集積されている (Fiske, Kitayama, Markus, & Nisbett, 1998)。

相互独立的自己観は、自己を他者から分離した独自の実体として捉えるものであり、西欧、就中、北米中産階級に典型的である。ここでは、自己は或る個人の持つ様々な特性によって定義されるが、それは周囲の状況とは独立なものである。他方、相互協調的自己観は、他者と互いに結びついた人間関係の一部として自己を捉える考えで、日本を含む亜細亜の文化に於いて一般的であると言う。ここでは、自己は他者との関係により規定され、その特性は他者を含む周囲の状況の性質によって変動する (Markus & Kitayama, 1991)。

文化的自己観の概念は社会的表象であり、必ずしも個人的・認知的表象ではない (北山, 1998)。併し、社会的表象は何等かの形で個人の価値や信念に反映され、個人の持つ自己の認識に影響する。ここで、人間という存在が個性的側面を持つと同時に社会的側面を持っている点に着目すると、相互独立的自己観は個性的存在としての人間、相互協調的自己観は社会的存在としての人間を強調していると考え得る。各々の側面を強調した捉え方が2つの自己観であると仮定すれば、所属する文化に拘わらず如何なる個人も双方の自己観に即した考え方を持つことが出来、各自己観の内面化の相対的優勢度によって個人差が生じる、という視点が成立する。斯かる観点から、相互独立的-相互協調的自己観尺度が近時幾つか公刊されている (Singelis, 1994; 木内, 1995; 高田・大本・清家, 1996; 高田, 1999a) <sup>2)</sup>。

これらの尺度を用い、測定された相互独立性・相互協調性の程度が<sup>3)</sup>個人の諸社会的行動に影響することを実証した知見が報告されている。即ち、相互独立的・相互協調的自己観が優勢な各々の文化間で観察された相違が、個人の相互独立性と相互協調性の程度に沿っても同様に観察されることが、幾つかの実証的資料によって示されている。例えば、相互独立性 (相互協調性) の高さは、以下の諸特性と相関することが双方の文化に共通して認められている。即ち、コミュニケーションに於ける「明確さ」の重要性に対する高 (低) 評価と「他者の感情への配慮」「聞き手からの否定的評価の回避」への低 (高) 評価 (Kim, Sharkey & Singelis, 1994) <sup>4)</sup>、自尊感情の高 (低) さ (Kwan, Bond & Singelis, 1997)、集合的自尊感情 (Luhtanen & Crocker, 1992) のうち同一性因子の低 (高) さと成員・私的・公的各因子の高 (低) さ (Sato & Cameron, 1999) <sup>5)</sup>、他者からの否定的評価への恐怖・社会的回避傾向の低 (高) さ (Okazaki, 1997) <sup>6)</sup>、対人場面での狼狽し難 (易) さ (Singelis *et al.*, 1999)、等である (括弧内は相互協調性の高い場合の傾向)。

他方、日本文化の中では、相互協調性 (相互独立性) の高い者は、自己認識の手掛かりとして社会的比較を用いる率が高 (低) い (高田, 1993)、日常事態での社会的比較の頻度が高 (低) い (高田, 1999b)、自己認識が否定 (肯定) 的である (高田, 2001)、高校生の場合乗車マナーが悪 (良) い (高田・矢守, 1998)、等の知見があり、亦、相互独立性が低くかつ相互協調性の高い者は、自己認識欲求が強い (上瀬・堀野, 1995)、自己査定行動を抑制する (清家・高田, 1997) ことが示されている。一方、米国に於いても、相互独立性 (協調性) は、対人場面での狼狽し難 (易) さと相関し (Singelis & Sharkey, 1995; Sharkey & Singelis, 1995)、相互独立性の高い者は「学習」についての信念が洗練されているという知見がある (Youn, 2000) <sup>7)</sup>。

これらの知見は、社会的表象たる相互独立的自己観・相互協調的自己観の相違に基づく諸社会

的行動の文化間変動と、個人の自己スキーマである相互独立性・相互協調性の程度に基づく社会的行動の個人間変動との並行関係を示唆している。併し乍ら、上記の諸研究は何方も、文化的自己観尺度と同時に実施された質問紙調査、乃至、心理検査への回答との相関分析に基づいている。斯様な方法によって得られた知見は、文化的自己観尺度と夫々の質問紙に対する反応様式が類似しているに過ぎぬ可能性を完全には除去し難いという制約がある。その点で、相互独立性・相互協調性の相違が、質問紙への反応以外の方途に反映される研究方式が要請されるが、そのような例としては、曖昧なコミュニケーションを被験者に呈示してその意味内容を解釈せしめる方法を用い、相互協調性の高い米国人学生は亜細亜系と欧羅巴系とを問わず、解釈の状況依存性が強い傾向があるという知見 (Singelis & Brown, 1995) を僅かに見るのみである。

斯かる状況下、本研究の目的は、日本文化と西欧文化との間で確認された行動の差異が、各文化内での相互独立性・相互協調性による差異と並行するか否かを、実験的方法を用いた研究に於いて検討することにある。具体的には、能力の社会的比較に於ける自己卑下の傾向 (高田, 1987) は日本人学生に特徴的で、加奈陀人学生では逆に自己高揚の傾向が優勢なことを実証した Heine, Takata & Lehmen (2000) の実験的知見を対象とし、当該研究の被験者に対して実施された相互独立的・相互協調的自己観尺度の尺度値に基づいた検討を加える。

Heine *et al.* (2000) によれば、加奈陀人大学生は、自分が知能の点で平均的他者より劣位にあることを示唆する情報に対しては、優位にあることを含意する情報に対してよりも、自分の成績を誤って判断する、判断に要する情報量が多い、判断に多くの時間を費やす、判断に対する確信度が低い、等の自己高揚的傾向を示した。これに対して、日本人大学生では、自己優位を示唆する情報に対して、誤判断が多く、判断に多くの情報を要すると共に時間を費やし、判断の確信度が低い、等の自己卑下の傾向が顕著であった。文化間変動と文化内変動が並行するとすれば、加奈陀人学生のうち、相互独立性の高い、あるいは相互協調性の低い者は、上記の自己高揚の傾向をより強く示す一方、日本人学生で相互協調性が高い、或いは相互独立性が低い者は、自己卑下の傾向が顕著であることが予想される。

## 方 法

**被験者：**Heine *et al.* (2000) の被験者のうち、事前に相互独立的・相互協調的自己観尺度 (高田他, 1996) に回答した日本人被験者124名 (奈良大学学生；女子57名、男子67名)、及び、同じく英訳版尺度に回答した加奈陀人被験者61名 (プリティッシュ・コロンビア大学学生；女子34名、男子27名)<sup>8)</sup>。

**概要：**各被験者は前半・後半2部構成の実験に参加する。後半の課題では、前半の課題での自分の成績と、他者の成績が呈示される。呈示された成績得点の自他の優劣が独立変数である。提示された得点を手掛かりとして、自他の能力の優劣を推断することが求められるが、その際、被験者が示した情報探索の程度、判断に要した時間、及び判断の確信度が主たる従属変数である。

**手続き：**被験者は1人で実験室に来室し「認知と判断」に関する検査を受ける。前半の課題は「統合的認知能力検査」と称し、パソコン画面上の格子状区画の中に描かれた図形の形と色を数

える課題（例：黄色の星型は赤い円型より幾つ多いか）20試行から成る。後半の課題は「不確実状況下の判断力検査」と称し、前半の課題中5試行分の成績が2名分示される。1つは被験者自身、他は「奈良大学或いはプリティッシュ・コロンビア大学学生の平均傾向をシミュレートすべくパソコンが算出した」と称する偏差得点（150～500点に分布）である。この際、自己の得点の20試行の平均が他者（平均的學生）の得点の平均より高いか低いかにより、成功条件（前者）と失敗条件（後者）が操作される。尚、呈示される自他の得点は、判断を成可困難ならしめるべく、全20試行の平均の差は小さく（平均18点差）試行毎の逆転が多いよう（得点差の標準偏差85.3点）に操作した。これは高田（1987）の平均差小・分散大条件に相当する。

呈示された自他の得点を基に、全体では何方の成績が優れているか判断することが後半の課題であるが、確信ある判断をするには更に情報が必要と被験者が答えれば、6試行目の自他の成績が示される。斯くの如くして被験者は最大20試行分の成績を見ることが可能であるが、何試行分の情報を求めたか（最低5、最大20）、更にその判断をするのに要した累計時間（コンピューターにより測定）が主たる従属変数である。亦、最終的判断をした時点でのその判断の確信度（9段階評定）も同断である。以上の手続きは全てパソコンと実験制御用ソフトMELを用いて行われ、被験者の条件配分は実験者の関知なく自動的に為された。以上の手続きが終了した後、操作チェック・付加的質問への回答が質問紙により求められた。

## 結 果

**操作の確認と被験者の選択：**高田（1987）の実験条件のうち、最も判断が困難な平均差小・分散大条件のみを実施した為、成功・失敗条件の操作を誤って認知した者が、加奈陀人被験者の場合、成功条件では10名（18.2%）、失敗条件では21名（28.0%）、日本人被験者の場合、成功条件では22名（34.9%）、失敗条件では16名（27.1%）あった。各条件で実験操作を正しく認知した者の割合は、成功条件では加奈陀人、失敗条件では日本人に有意に多く（ $\chi^2(1)=4.95$   $p<.03$ ）、加奈陀人の自己高揚的傾向と日本人の自己卑下的傾向が示されている（図1）。以後の分析は、Heine *et al.*（2000）に従い、条件操作を正しく認知した者のみを対象とする。

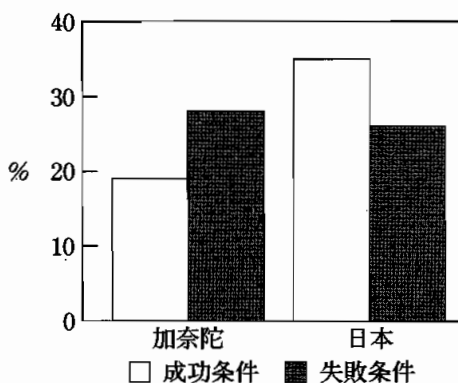


図1 誤判断の割合

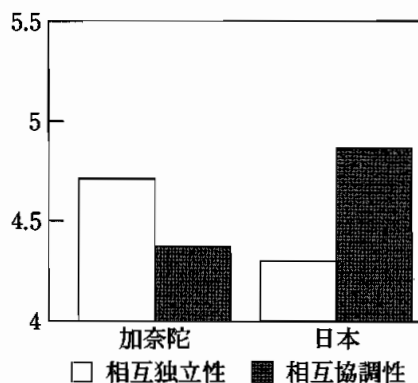


図3 平均尺度値

**条件間の差異：**加奈陀人及び日本人に於ける、判断の確信度（1～9）、情報探索数（5～20）、判断に要した累計時間（msec）の成功・失敗各条件毎の平均値を図2に示す。これら3指標に於ける文化×条件の交互作用は全て有意であり（情報探索数： $F(1,171)=3.90, p<.05$ ；判断累計時間： $F(1,171)=5.88, p<.02$ ；確信度： $F(1,171)=12.81, p<.0001$ ）、情報探索数が多く、累計時間が長く、確信度が低いのは加奈陀人では失敗条件、日本人では成功条件である（Heine *et al.*, 2000）。斯くの如く加奈陀人の自己高揚傾向と日本人の自己卑下傾向が明瞭であり、日本人被験者の情報探索数と確信度に関する結果は、高田（1987）の知見を再現している。

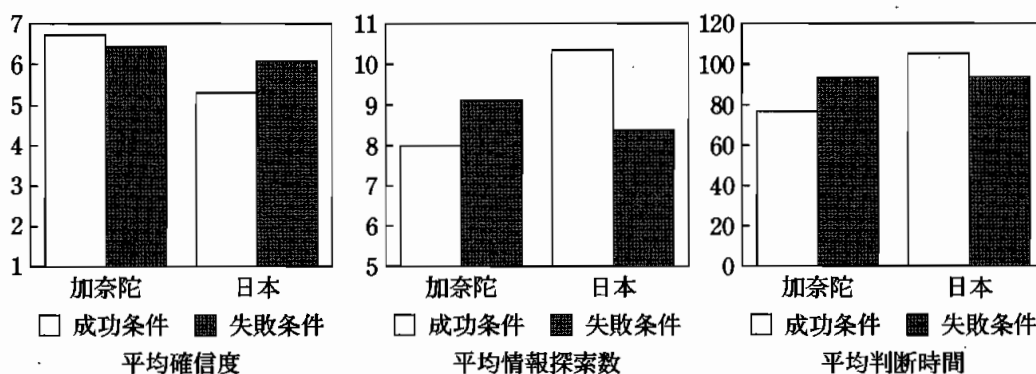


図2 文化間の差異

**相互独立性・相互協調性の水準：**加奈陀・日本双方の被験者の相互独立性と協調性各10項目に対する7段階評定の平均値は図3に示す如くである。相互独立性では加奈陀人（4.72； $sd=0.74$ ）が日本人（4.35； $sd=0.77$ ）より平均値は有意に高い（ $t(183)=3.24, p<.001$ ）。相互協調性は日本人の平均値（4.96； $sd=0.63$ ）が加奈陀人（4.40； $sd=0.79$ ）より有意に高い（ $t(183)=5.18, p<.0001$ ）。

この日本人被験者の尺度値は、相互独立性・相互協調性の発達の相連を大量サンプルに基づく横断資料により検討した、高田（1999a）の知見に於ける大学生の平均値（相互独立性：4.36、相互協調性：4.96）と殆ど同一の水準にあり有意差はない（夫々 $t(123)=1.40, 1.18$ ）。一方、加奈陀人被験者の相互独立性の尺度値は、加奈陀人大学生の平均的な値（4.97；高田, 1999a）に比べて有意に低い（ $t(60)=3.00, p<.01$ ）。相互協調性に就いては、平均的値（4.56）との間に有意な差はない（ $t(61)=1.56$ ）。依って、本研究の被験者の相互独立性・相互協調性の水準は、日本人に就いては一般傾向を代表していると言えるが、加奈陀人の場合は相互独立性が低い方向に偏っている可能性がある。

亦、実験条件間の等質性に就いて、日本人の場合は、相互独立性（ $t(120)=0.48$ ）、相互協調性（ $t(120)=0.31$ ）の双方とも、条件間の平均値に有意な差は見られなかった。併し、加奈陀人に就いては、相互独立性では有意差はないものの（ $t(59)=0.38$ ）、相互協調性に関しては、成功条件（4.71）の被験者は失敗条件（4.23）の被験者より、有意に相互協調性が高かった（ $t(59)=2.40, p<.02$ ）。

**相互独立性・相互協調性との関連：**判断の確信度、情報探索数、及び、判断に要した累計時間

を従属変数、相互独立性と相互協調性を独立変数とした重回帰分析を日本人被験者と加奈陀人被験者に分け、成功・失敗条件毎に実施した結果を表1に示す。

表1 各指標への相互独立性と相互協調性の影響

		情報探索		判断時間		確信度	
		$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
加奈陀							
成功条件	相互独立性	-.05	-.09	-.10	-.10	.16	.18
	相互協調性	.14	.15	-.02	.01	-.07	-.11
失敗条件	相互独立性	-.18	-.19	-.14	-.15	.25	.18
	相互協調性	.34	.09	.04	.08	.24	.17
日本							
成功条件	相互独立性	-.26*	-.21 <sup>?</sup>	-.19	-.16	.29*	.21 <sup>?</sup>
	相互協調性	-.15	-.05	-.07	.00	.20	.09
失敗条件	相互独立性	-.08	-.07	.29*	.21	.02	.00
	相互協調性	-.04	-.01	-.25 <sup>?</sup>	-.16	.07	.06

$\beta$  : 標準偏回帰係数  $\gamma$  : 相関係数 \* $p < .05$  ? $p < .10$

日本人被験者の場合、成功条件では、情報探索と確信度を従属変数とした場合に有意な重相関係数が得られ(夫々.35、.38)、相互独立性の標準偏回帰係数は情報探索と確信度で有意である。即ち、相互独立性の高い者は情報探索数が少なく、確信度が高い傾向が示されている。他方、失敗条件の判断時間に於いて重相関係数が有意で(.32)、相互独立性と相互協調性の標準化回帰係数が有意或いは有意に近く、相互独立性の高い者は判断時間が長く、相互協調性の高い者はそれが短い傾向が示されている。

相互独立性の尺度値が平均より高い者を相互独立性高群、低い者を相互独立性低群とした場合の、各々の確信度、情報探索数、判断時間の平均値を示したのが図4である。平均確信度では、成功条件と失敗条件との差は相互独立性低群に於いては有意であるのに対し(成功条件: 5.82 ( $sd=1.49$ ), 失敗条件: 4.69 ( $sd=1.73$ ),  $t(63) = 2.83 p < .01$ )、相互独立性高群では有意差はない(成功条件: 6.04 ( $sd=1.59$ ), 失敗条件: 5.42 ( $sd=1.61$ ),  $t(55) = 1.46 ns$ )。平均情報探索

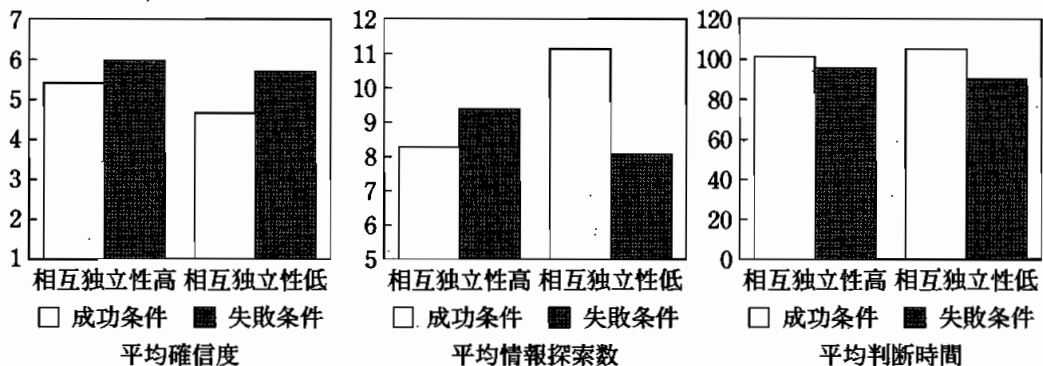


図4 相互独立性に関する日本人被験者内の差異

数に於いても、成功条件と失敗条件との間に有意差が見られるのは相互独立性低群のみである（相互独立性低群では、成功条件：11.16 ( $sd=4.99$ )、失敗条件：8.12 ( $sd=3.17$ )、 $t(63) = 2.93$   $p < .01$ ）。相互独立性高群では、成功条件：8.35 ( $sd=3.72$ )、失敗条件：9.39 ( $sd=3.68$ )、 $t(55) = 1.06$   $ns$ ）。平均判断時間でも相互独立性低群では条件間に有意傾向が認められるのに対し（成功条件：1147.79 ( $sd=34.06$ )、失敗条件：975.65 ( $sd=40.44$ )、 $t(63) = 1.85$   $p < .08$ ）、相互独立性高群では有意差はない（成功条件：112.08 ( $sd=38.24$ )、失敗条件：104.49 ( $sd=35.26$ )、 $t(55) = 0.77$   $ns$ ）、全体として相互独立性低群に於いて、一般に日本人被験者が示した傾向がより強く現れていることが分かる。

これに対し、加奈陀人被験者に於いては、何方の重相関係数も有意でなく、相互独立性・相互協調性と自己高揚・卑下傾向との関連は全く見られなかった。

## 考 察

Heine *et al.* (2000) の結果では、誤判断率、判断の確信度、情報探索数、及び、判断に要した累計時間に関し、有意な文化×実験条件の交互作用が報告されている。即ち、加奈陀人学生は失敗条件より成功条件で、誤判断が少なく、確信度は高く、情報探索回数が少ない傾向があり、判断に要する累計時間も有意に少ないという自己高揚傾向を示している。それに対し、日本人学生では、成功条件より失敗条件で、誤判断は少なく、確信度が有意に高く、情報探索回数が有意に少なく、判断に要する時間が少ない傾向があるという自己卑下傾向が示されている。亦、斯かる諸従属変数の文化間の差異は、測定された相互独立性・相互協調性の文化間の差異と完全に対応している（図1～図3参照）。従って、本研究で見られた諸従属変数の文化間変動は、相互独立的・相互協調的自己観を反映していると見て良からう。

他方、日本人被験者で相互協調性が高い、或いは相互独立性が低い者は、自己卑下傾向が顕著であろうという予想は、一部支持された。即ち、相互独立性の低い者ほど、成功条件で情報探索回数が多く、確信度が低い、失敗条件では判断に要する累計時間が短くなるという、自己卑下の傾向が示されている。一方、相互協調性に関しては、失敗条件で相互協調性の高い者ほど判断時間が短いという予想に沿った傾向が示されているが、相互独立性の効果ほどには明確でない。

このような結果は、逆に、相互独立性の高い者ほど、成功条件で情報探索回数が少なく、確信度が高いが、失敗条件では判断に要する累計時間が多くなるという、相対的に自己高揚的な傾向が示されているとも言え、その意味では、日加の文化間変動と、日本文化内での相互独立性の程度による文化内変動との間には或程度の並行関係があることを示唆すると言える。併し、図4に示したように、相互独立性が平均以上に高い被験者に於いても、日本人被験者の示す一般傾向が弱められただけであり、加奈陀人被験者が示す一般傾向——失敗条件よりも成功条件で、確信度が高く、情報探索数が少なく、判断時間が短いという、絶対的な自己高揚傾向は示されていない。

他方、加奈陀人被験者に関しては、相互独立性・相互協調性と自己高揚・自己卑下傾向との関

連は全く見られなかった。但し、加奈陀人被験者の尺度値には幾つかの問題がある。例えば、尺度を実施した被験者の相互独立性は、加奈陀人学生の一般平均より有意に低かった。従って、相互独立性の強い者が更に自己高揚傾向を示す可能性を検討するには、今回の被験者は不適切であった可能性がある。事実、失敗条件の情報探索数に於いて、Heine *et al.* (2000) の知見 (9.15) に比べ、今回分析した被験者は有意に少ないとともに ( $8.28 : t(38) = 2.03 p < .05$ )、成功条件での判断累計時間が、Heine *et al.* (2000) の知見 (78.40msec) に比べて長い傾向 ( $90.48\text{msec} : t(21) = 1.90 p < .07$ ) が見られ、全体として自己高揚傾向が弱い方向にある。

亦、相互独立性・相互協調性の実験条件間の等質性が確保されておらず、成功条件の被験者の相互協調性は失敗条件のそれより有意に高かった。即ち、加奈陀人被験者に関して、とりわけ成功条件に於いては上述の如く相互独立性の水準が低い上、相互協調性が高い為に、予測した成功時の自己高揚傾向が拡大される余地が乏しかった可能性は高い。併し、上述した、Heine *et al.* (2000) と今回の知見の差も含め、このような疑義が生じること自体、相互独立性・相互協調性の水準が、加奈陀人被験者に於いても自己高揚・自己卑下傾向に影響を与えている可能性を示唆していよう。何方にせよ、被験者全員に尺度が実施されていないことも含め、加奈陀人に関する確定的な知見に関しては、今後更なる資料を集積するまでは、これを保留すべきであろう。

斯かる留保条件を付した上で、今回の知見に於ける着目すべき事項として、日本人被験者の場合、相互独立性の効果は相互協調性の効果より顕著であったことが挙げられる。即ち、日本文化では優勢でない相互独立的自己観の影響が相対的に大きいと言えるが、本研究の被験者が属する青年期には、日本文化で支配的な相互協調的自己観が積極的に内面化される可能性を示唆する知見が得られている (高田, 1999a; 2001)。従って、一方の自己観が圧倒的に優勢である状況下では、その自己観が個人に反映された程度が個人の行動を規定する余地は少ない一方、それと拮抗する他方の自己観の内面化の程度こそが、個人レベルの影響度を左右する可能性が示唆されるのである。

勿論、欧米に於いて相互独立的自己観が個人に内面化される発達の過程と、そこでの青年期の位置に関する知見に乏しい現在<sup>9)</sup>、これは単なる推論の域を出ない。然りと雖も、欧米に於いて相互独立性・相互協調性の影響を、大学生を対象に質問紙以外の方法を用い検討した前述した Singelis & Brown (1995) の知見では、相互独立性の効果はなく相互協調性の影響のみが観察されていることを考慮すれば、相互独立性・相互協調性の影響の非対称性とその文化による差異の問題は、今後検討されるべき課題の1つであろう。

本研究の結論として、日本人被験者に関しては、文化間変動と文化内変動とは或る程度関連してはいるが、完全に対応しているとは言えず、加奈陀人被験者に就いても、その示唆は得られたものの、明確な知見は得られなかった。自己観尺度自体の文化規定性の可能性も含め、文化間変動と文化内変動との関係に関しては今後更に検討を要すると思われる。



## 注

- 1) 本研究は、日本グループ・ダイナミックス学会第47回大会に於いてその概要を報告したものである(高田, 1999c)。尚、実施にあたり平成8・9年度文部省科学研究費(C0861015)の助成を受けた。
- 2) これらのうち、木内(1995)の尺度は2つの自己観の相対的優位性を1次元的に測定している点で異質であり、相互独立性と相互協調性は相対的に独立している可能性の点で一考を要する。亦、Singelis(1994)と高田他(1996)の尺度は、夫々米国と日本に於いて独自に開発された類似の尺度であるが、測定される相互協調性の内容には異質なものがある(Kashima & Hardie, 2000)。相互独立的・協調的自己観と近縁の概念である集団主義・個人主義の測定尺度を含め、これらの自己観尺度の相互関係に就いてはKashima & Hardie(2000)を参照。
- 3) 文化間の相違に就いての概念である相互独立的・相互協調的自己観と区分する為、尺度により測定された個人差に関しては相互独立性・相互協調性の用語を用いる。
- 4) この研究では、Singelis(1994)の尺度の原型である11項目尺度が用いられている。以下、特記する以外はSingelis(1994)の尺度による知見である。
- 5) 本研究は日本人学生と加奈陀人学生を対象者としているが、相互独立性の尺度値の平均は日本人と加奈陀人の間で有意差が無く、相互協調性では加奈陀人が日本人より有意に高かったことが示されている。これは、相互独立性は加奈陀人が日本人より、相互協調性は日本人が加奈陀人より高いという、当然予期される傾向を示した高田他(1996)の尺度による結果(高田, 1999a)とは全く異なる。従って、(1)本研究の調査対象者の偏り、(2)Singelis(1994)尺度の日本人に対する適用可能性への疑問、が示唆され、本研究の知見の妥当性には疑念がある。後者に関しては、米国人学生の相互独立性は日本人学生より高いことをSingelis(1994)尺度を用いて報告している例もあるが(Ozawa, Crosby & Crosby, 1996)、これは相互協調性項目を逆転項目扱いとした1次元処理を行った結果であるため、尚問題は残される。
- 6) この研究では、高田他(1996)の尺度の母胎である高田(1993)の尺度が用いられている。
- 7) 米国での知見はSingelis(1994)、日本での知見は上瀬・堀野(1996; 高田(1993)の尺度を使用)を除いて、高田他(1996)の尺度が夫々用いられている。
- 8) 加奈陀人被験者では手違いで全員に尺度を実施出来なかった。亦、日本人被験者数がHeine *et al.* (2000)と異なるのは、尺度に回答しなかった被験者を除いた為である。
- 9) 米国人の年輩者は社・青年よりも、個人の特性を判断する際に状況的要因を重視し、或る意味で相互協調的自己観に親和性のある傾向を示すという知見(Noricks, Agler, Bartholomew, Howard-Smith, Martin, Pyles, & Shapiro, 1987)が報告されている。

## 引用文献

- Fiske, A.P., Kitayama, S., Markus, H.R., & Nisbett, R.E. 1998 The cultural matrix of social psychology. In D.T. Gilbert, S.T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.) *The Handbook of Social Psychology*. 4th ed. Vol.2. New York; McGraw-Hill. Pp. 915-981.
- Heine, S.J., Takata, T., & Lehman, D.R. 2000 Beyond self-presentation: Evidence for self-criticism among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 71-78.
- Kashima, E. & Hardie, E.A. 2000 The development and validation of the relational, individual, and collective self-aspects (RIC) scale. *Asian Journal of Social Psychology*, 3, 19-48.
- Kim, M., Sharkey, W.F., & Singelis, T.M. 1994 The relationship between individuals' self-construals and perceived importance of interactive constraints. *International Journal of Intercultural Relations*,

- 18, 117-140.
- 木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- 北山 忍 1998 自己と感情 文化心理学による問いかけ 共立出版
- Kwan, V.S.Y., Bond, M.H., & Singelis, T.M. 1997 Pancultural explanations for life satisfaction: Adding relationship harmony to self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 1038-1051.
- Luhtanen, R. & Crocker, J. 1992 A collective self-esteem scale: Self-evaluation of one's social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 302-318.
- Noricks, J.S., Agler, L.H., Bartholomew, M., Howard-Smith, S., Martin, D., Pyles, S., & Shapiro, W. 1987 Age, abstract thinking, and the American concept of person. *American Anthropologist*, 89, 667-675.
- Okazaki, S. 1997 Sources of ethnic differences between Asian American and white American college students on measures of depression and social anxiety. *Journal of Abnormal Psychology*, 106, 52-60.
- Ozawa, K., Crosby, M., & Crosby, F. 1996 Individualism and resistance to affirmative action: A comparison of Japanese and American samples. *Journal of Applied Social Psychology*, 26, 1138-1152.
- Sato, T. & Cameron, J.E. 1999 The relationship between collective self-esteem and self-construal in Japan and Canada. *Journal of Social Psychology*, 139, 426-435.
- 清家美紀・高田利武 1997 文化的自己観と自己査定行動 - 日本文化における検討 - 社会心理学研究, 13, 23-32.
- Singelis, T.M. 1994 The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 580-591.
- Singelis, T.M., Bond, M.H., Sharkey, W.F., & Kriss, S.Y.L. 1999 Unpackaging culture's influence on self-esteem and embarrassability: The role of self-construals. *Journal of Cross Cultural Psychology*, 30, 315-341.
- Singelis, T.M. & Brown, W.J. 1995 Culture, self, and collectivist communication: Linking culture to individual behavior. *Human Communication Research*, 21, 354-389.
- Singelis, T.M. & Sharkey, W. 1995 Culture, self-construal, and embarrassability. *Journal of Cross Cultural Psychology*, 26, 622-644.
- Sharkey, W.F. & Singelis, T.M. 1995 Embarrassability and self-construal: A theoretical integration. *Personality and Individual Differences*, 19, 919-926.
- 高田利武 1987 社会的比較による自己評価における自己卑下の傾向 実験社会心理学研究, 27, 27-36.
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較 - 日本人大学生にみられる特徴 - 教育心理学研究, 41, 339-348.
- 高田利武 1999a 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 - 比較文化的・横断的資料による実証的検討 - 教育心理学研究, 47, 480-489.
- 高田利武 1999b 日常事態における社会的比較と文化的自己観 - 横断的資料による発達の検討 - 実験社会心理学研究, 39, 1-15.
- 高田利武 1999c 社会的比較に於ける自己卑下傾向と相互独立性-相互協調性との関連 - 文化間変動と文化内変動は並行するか? - 日本グループ・ダイナミクス学会第47回大会発表論文集, 48-49.
- 高田利武 2001 自己認識手段と文化的自己観 - 横断的資料による発達の検討 - 心理学研究, 72, 378-386.

- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立的－相互協調的自己観尺度（改訂版）の作成 奈良大学紀要, 24, 157-173.
- 高田利武・矢守克也 1998 高校生の乗車行動と文化的自己観 青年心理学研究, 10, 19-34.
- Youn, I. 2000 The culture specificity of epistemological beliefs about learning. *Asian Journal of Social Psychology*, 3, 87-105.

### Summary

The purpose of this study is to investigate whether inter-cultural variance in social behavior corresponds to intra-cultural variance in individuals. Research has demonstrated that while the former is mediated by the cultural construal of self, the independent and interdependence construal of self (Markus & Kitayama, 1991), the latter reflects one's internalized self-construal, the extent of independence and interdependence measured by the self-construal scale (e.g., Singelis, 1994; Takata, Omoto & Seike, 1996).

In a previous cross-cultural study with Canadian and Japanese by Heine, Takata & Lehman (2000), the results revealed that Canadian participants tended to be self-enhancing, while Japanese counterparts self-critical. In this study, Takata *et al.* (1996)'s scale was administered to participants in Heine *et al.*'s study, then the relationship between self-enhancing/critical behavior and the responses to the self-scale was examined for each culture group.

As a result, it was found that the independent/interdependent mean scores were significantly lower/higher for Japanese than for Canadian participants. Which suggests that the level of individual independence and interdependence underlie the cultural differences concerning self-enhancing and critical behavior. The results showed also that the higher the independence score, the weaker the self-critical tendency in the Japanese participants. This fact demonstrates the correspondence between inter-cultural differences and intra-cultural differences. However, this correspondence was not found in the case of the Canadian participants, owing probably to the small number of the participants who completed the self-scale.

